

P. パニスター・E. パーマン・I. パーカー・M. テイラー・C. ティンダール著
五十嵐靖博・河野哲也 監訳 田辺肇・金丸隆太 訳

『質的心理学研究法入門
—リフレキシビティの視点—』

新曜社 2008年 A5判 260頁 ¥2940(税込)

小野奈生子

身近な事柄や状況について漠然とした問題意識や素朴な疑問を抱いてはいるものの、それらの問いにまずはどのようにアプローチすればよいのか——こうした悩みを抱えている学生にとって、本書は導きの糸となる一冊であるといえよう。なかでも、従来のような個別の文脈を越えた「客観性」を追究する研究とは異なり、日常的な場面から生まれてくる問いに対して、日常的な視点から接近する研究を試みようとする者にとっては、非常に役立つものである。

本書において、その詳細な紹介がなされる「質的研究」は、ひとまず次のように定義される。「ある特定の論点あるいは問題についての解釈による研究であり、そこでは解釈がなされるという意味で、研究者が中心的な役割を果たしている」(本訳書, p.2)。これは従来のもので心理学において主流とされる「量的研究」との対比を意識してなされた定義であるが、「客観的な対象」を、主観を交えずにいかにか純粋に描き出すかをめざしてきた量的研究の限界と問題点を端的にまとめたうえで、2章以下では、対象をとらえる研究者自身をも意識的に取り込みながら研究を展開していく方法がまさに具体的な事例を伴って提示されているのである。この具体的な事例の提示は調査初心者にとって非常に重要なものである。

というのも、いざ質的研究にとりかかろうとするとき、われわれはまず二つの大きな壁に直面してしまうからである。ひとつは、どのような(に)問いを立てればよいかということであり、もうひとつは、対象に対して研究者である自分をいかに位置づければよいかということである。

まず1点目に関しては、膨大な資料を前に何をしてよいのか途方に暮れるという経験がそれであ

る。問題意識や疑問を抱くことになった日常的な場面への接近そのものは比較的容易であるとしても、それを明確な問いのもとに分析するという作業は思っているよりも困難である。この困難さは、研究において何を問いとするかと、そこでどのような方法論を選択するべきかとは切り離して考えることができないものであるということに起因する。つまり、一方でどれほど強くある状況に疑問を抱いたとしても、方法論を知らなければその問いにそれ以上接近することはできないし、もう一方でどれほど緻密にある特定の方法論について知っていたとしても、それがそもそもの問いに適合するものでなければ意味がない。問題関心と方法論を一致させることは研究のスタートでもあり、ある意味でのゴールでもあるといえる。そのひとつひとつの手続きを本書は示してくれているのである。

さらに2点目に関しては、各章で一貫して意識されている「リフレキシビティの視点」がひとつの方向性を示してくれる。純然たる客観的な対象をその外側からとらえようというのではなく、調査者である自分が対象に与える影響をも研究の対象としてとらえることで、調査に向けられるいくつかの批判に答えられるのである。まず個別性を特徴とする質的研究は、自分にとって都合のよい事例を恣意的に選択しているのではないかと受け取られがちである。しかし、研究結果があくまで特定の方法論のもとに導き出された暫定的なものであることを認め、別の読みの可能性を留保することで研究の恣意性を乗り越えることができる。さらには、研究の対象者をただ一方的に研究されるのを待つ者としてでなく、協同して研究を紡ぎあげる者としてみなすことで、調査に付随しがちな倫理的な問題をもクリアすることができるのである。

紙幅の都合上ここでは具体的な研究の紹介が全くできなかったが、冒頭で述べたように、「どうやって研究をしたらよいかわからない」という根本的な悩みを抱えている学生には、まず手にとってほしいと思う一冊である。